

米国の薬剤師の幅広い職能と
それを支える薬学教育

薬学部 薬学科 6年

060973240

布目 貴大

米国サンフォード大学薬学部及び、提携医療機関における 2 週間の海外臨床研修に参加した。参加者 10 名の学生は 3 又は 4 人ずつ 3 グループに分けられ、それぞれ病院、薬局などを訪問し見学した。私のグループは Southern Medical Services (TPN 等の混注を専門に扱う薬局)、Homewood Pharmacy (調剤薬局)、Christ Health Center (クリニック内に併設している薬局)、Jefferson County Dept. of Health, Western Health Center (糖尿病外来)、St. Vincent' s Hospital, Oncology (がん病棟)、St. Vincent' s East Family Practice (ワーファリンクリニック)、Jefferson County Department of Health (保健所) を見学した。また、大学での講義、ケースディスカッション等にも参加した。その中で最も印象的だったことは、米国では、薬剤師の職能が日本よりも広く、また、米国には多様な薬局が存在し、薬剤師は自分の専門分野を持って仕事をしている、ということである。

例えば、アラバマ州では薬剤師にワルファリンの処方権がある。St. Vincent' s East Family Practice では薬剤師がワルファリンクリニックを行い、ワルファリンの投与量の調節を行っていた。日本ではいずれの医薬品においても薬剤師の判断で投与量を変更する権限は与えられていない。また通常日本の薬局では、1 人の患者に対し、5 分程度のインタビューが一般的であるが、St. Vincent' s East Family Practice では、20 分程度の時間を使ってインタビューを行っていた。St. Vincent' s East Family Practice において薬剤師または薬学生がインタビューを行い、ワルファリンの投与量を決定するまでの流れを見学した。インタビューは、フォーマットに沿って行い、服薬状況、副作用 (様々な出血部位毎に細かく)、生活習慣といった内容を確認していた。興味深いことに、薬剤師がインタビューの際に患者から採血し、INR の測定を行っていた。インタビューの内容と INR 値から投与量の調節、生活指導、服薬指導を行っていた。そのため、比較的安定している患者は医師の受診を必要とせず、薬剤師による投与量の調節のみで治療を受けることが出来る。それにより、医師はより重篤な患者の治療に集中している。このように米国では、職種毎の役割がより明確に分かれており、薬剤師はその役割をより広い範囲で確立していた。

日本では、薬剤師は採血を行う事が出来ないため、INR の測定を行う事はできない。ワルファリンについては薬剤師が介入しやすい分野であることは間違いない。近い将来、日本の薬剤師も深く介入していけることを確信した。

一方、Southern Medical Services は、デリバリーメインで注射剤混注業務を行う薬局であった。薬局内にクリーンベンチを有し、病院から来たオーダーに対し、中心静脈栄養 (TPN) や抗生物質の混注業務を行っていた。薬局内にはテクニシャンという調剤業務を行う職種がおり、混注業務は薬剤師又はテクニシャンが行っていた。混注業務は昨年経験した日本の病院での実務実習ではシリン

ジを使って行われ、大変手間のかかる作業であったが、Southern Medical Services ではオートメーション化されており、オーダーを入力すると、連結したポンプから自動でバッグ内に注入され、効率的に行われていた。注射剤混注業務を委託する病院のメリットとしては、病院にクリーンルームおよびクリーンベンチを設置する必要がなくなり維持費やメンテナンス費用、さらにそこに常駐する人件費を削減できることにある。また、輸液のみに特化することで高品質の製剤を大量に調整できるためより安全で、より低価格で供給することができる。これらのことが、病院及び患者の負担を多いに減少させ、更には医療費の削減にもつながることとなる。

日本においては、注射剤混注業務を専門に扱う薬局の設立は難しいかもしれない。しかし、近年、日本では、いくつかの薬局はクリーンルームおよびクリーンベンチを設置し、注射剤混注業務を行う体制を整えてきている。今後、高齢化が更に進む日本において街の薬局において注射剤混注業務を行うことは急務となるだろう。今後これらの薬局がさらに体制を整える上で、Southern Medical Services のように米国で混注業務を専門に扱っている薬局は参考になるだろう。

この米国の薬剤師の広い職能を支えているのが、大学や医療機関での薬学生の教育であると感じた。サンフォード大学の薬学教育のカリキュラムでは 8 ヶ月の間、1 ヶ月毎に様々な医療機関で実務研修を行う。また米国ではレジデントが一般的であり、薬学生はファカルティ、レジデントのもとで実習を行っていた。日本においても薬学部 6 年生教育が始まり、私自身 1 期生として、5 ヶ月間の臨床実習を経験した。また、レジデントを導入する病院も増えてきている。今後、日本の薬学教育も米国と同じレベルになることが期待出来るだろう。

最後に、今回の海外臨床研修に参加したことは私にとって有意義な経験となった。日本とは違う医療体制、薬剤師の役割をみる事が出来たこと、文化や国民性の異なる人々とのコミュニケーションをとることが出来たことで視野を広げる事ができた。米国の薬剤師の取り組みを日本に取り入れるために、より一層の知識、技能の習得に力を入れていきたい。